【書評論文】
長谷川 欣佑著 『生成文法の方法 英語統語論のしくみ』研究社、2003年12月、A5版 viii＋301pp.

野 村 忠 央

キーワード：一般A-over-A原則、複雑度の理論、
目的語位置への繰り上げ、基本的・長距離照応規則、時制文条件。

＜Abstract＞

In this review article I discuss Hasegawa (2003) *Seeseebunpoo no Hoohoo—Eegotoogoron no Shikumi* [Approaches to Generative Grammar: The Fundamentals of English Syntax].

For many years, beginning in the 1960's, Kinsuke Hasegawa has criticized Chomsky's theory (including the Minimalist Program) and developed his own theory of generative grammar; it can be said that this book is a compilation of his studies to date.

Compared with Chomsky's (1986a) proposal to eliminate c-selection as well as phrase structure rules, which is firmly maintained in the Minimalist Program (Chomsky (1995, 2000, 2000a, b)), Hasegawa's standpoint is that "there are purely syntactic regularities in particular languages that cannot be reduced into semantic properties of lexical items". He also claims that *Generalized A-over-A Principle,* originally proposed in 1974 (Hasegawa (1974a, b)), is crucially concerned with many syntactic phenomena such as NP-movement, Control, Anaphora, etc. He also proposes to explain *wh*-movement by using the notion of *Degree of Complexity,* pointing out problems with Chomsky's (1986b) *Barriers* theory.

In this paper, after briefly reviewing this book, I critically discuss and develop his suggestions and explanation, especially his basic standpoint in this book, GAoA, Basic Anaphora Rules (BAR) and Long Distance Anaphora Rules (LDAR), his Degree of Complexity approach, and the Tensed-S Condition (TSC).

1．はじめに

本書は、1960年代から今日まで、伝統的な生成文法理論に立脚しつつも随所に独自の説を展開してきた著者の「長谷川理論」（以下、著者の言語理論を便宜上そう呼ぶことにする）の集大成と言える著作である。本稿では本書の内容紹介にとどまらず、長谷川理論の提案・説明を批判的かつ発展的に論じたいと思う。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第２節で本書の内容を概観する。そして第３節では本書の内容に関し、本書を通じて一貫して有意に論じられている、著者の基本的立場、照応理論、一般A-over-A原則、複雑度の理論、に絞って評価を与え、いくつかの問題点について議論する。第４節は結論である。

2．本書の概要

まず本書の内容を概観する。但し本節では、紙幅の関係上、第３節の「議論」に大きく関わる「第Ⅰ部総論６～９章」の概観を中心にすることとし、著者が「入門的な概論」と記している「総論１～５章」と「第Ⅱ部　特論」の各章の内容は ― 重要であり、興味深い提案・議論が多いことは言うを俟たずも ― 簡潔に概観することをお断りしておく。

2．1「第Ⅰ部　総論　第１章～第５章」

「第１章　ことばの仕組 ― 文構成の原理」では、言語能力（Competence）と言語運用（Performance）の区別、話し手が暗黙裡に従っている規則性の発見手順例などが示された後、「どんな言語も「句構造規則」と「変形」を用いて文を組み立てている」（p.20）（以降、ページ数のみの表示は本書のもの）という生成文法理論の重要な仮定が論じられている。

「第２章　「変形」を含む構文分析例」では、最近の理論からすると問題はあるが、経験的立場からは、外置変形、Tough構文移動変形、繰り上げ変形などの「変形」が必要であること、また助動詞的要素（時制形態素）の分析としては、最近の説（Pollock（1989）やChomsky（1995）など）と比較検討してみても、結局、Chomsky（1957）の古典的分析（接辞転移、not牽引、do挿入など）が、最も明快・的確に英語の規則性を表現している、と論じている。[1)]

「第３章 文構造の概観Ⅰ」では、本書が拠って立つ句構造規則と、本書の根幹主張である「個別言語には、単語の意味特性に還元しえないような、純粋に統語構造上の規則性が存在する」(p.73) が解説される。そして、「副詞的要素と文 (S) を構成する要素との関係」、notは特別なVP副詞であってNegPの主要部ではないこと、などが重点的に述べられる。

「第４章 文構造の概観Ⅱ：動詞句」では、補部と付加部、その判断基準としてのdo soテスト、複合動詞、与格構文と二重目的語構文の意味の違い、構造がもたらす意味、受動構文、「変形を単一の演算に限定すべきこと」(cf. Hasegawa (1968))、などが論じられている。

「第５章 文構造の概観Ⅲ：名詞句」では、動詞句と同様、補部と付加部の区別、その判断基準としてのoneテスト、などが論じられ、それを基に関係節の構造が論じられるのだが、関係詞の先行詞は一般的に言われるが如くNPではなくN'だというのが著者の主張である。

２．２「第Ⅱ部 総論 第６章 一般原理（一般A-over-A原則）とコントロール（制御）・繰り上げ変形」

本書総論の６～８章は長谷川理論の根幹をなすものである。特に６・７章の目的は、「制御 (Control) の構造、繰り上げ変形 (Raising)、照応関係が関与する文法現象の中核的部分は、「一般A-over-A原則」によって統一的に説明することができる」(p.125) ことを示すことである。まず「一般A-over-A原則」の定義を以下に挙げる。

(1) 一般A-over-A原則 (Generalized A-over-A Principle：GAoA)

R (A, B) が、A_1, A_2, Bを含む句構造に適用される際、

(i) A_1とA_2が共にRの一項Aを満足し、

(ii) $A_1 > A_2$が成り立つ場合：

a. $A_2 > B$ (即ち$A_1 > A_2 > B$) ならばRはA_2にのみ適用しうる (A_1には適用できない)

b. $A_2 \not> B$ (即ちa.以外の場合：$A_1 > A_2 \not> B$) ならばRはA_1にのみ適用しうる (A_2には適用できない)

c. 定義：A＞B＝AはBより上位である＝Aを支配する最初の主要文

法範疇（Major Category；MCと略）がBを支配するが逆は成り立たない（Bを支配する最初のMCはAを支配しない）
主要文法範疇（MC）＝X', XP, 及びS, S'（X＝V, N, A, P）；ただし補部として働くPPはMCとしてカウントしない（以上、p.126）

GAoA適用の例示として、いわゆる「指定主語条件」の場合を見てみよう。

(2) [$_{NP}$ △] seems [$_{S}$ [$_{NP1}$ John] to love [$_{NP2}$ Mary]] (p.127)

繰り上げ変形によって移動先[$_{NP}$ △]（上記のBに相当）に移動できる候補はNP_1（A_1）とNP_2（A_2）の2つがあり、両者には$NP_1 > NP_2$の関係が成り立つ。よって、NP_2と移動先の[$_{NP}$ △]との上位関係を調べると、$\underbrace{NP_1 > NP_2 \not> [_{NP}\ \triangle]}$が成り立つので、上記（1b）により、移動できるのはNP_1のJohnということになる。

次に上記のBが照応形になる単純なGAoA適用例をもう一例、示しておこう。

(3) John thinks that Mary admires $\left\{\begin{array}{l}\text{herself}\\ \text{*himself}\end{array}\right\}$ (p.127)

この場合略記すると、John > $\underbrace{\text{Mary} > \text{Pro}}$self（再帰代名詞）が成り立ち、今度は上記（1a）により、先行詞はMaryが選ばれ、herselfのみが許されるということになる。

さて、著者はこのGAoAが広く、繰り上げやコントロールの現象を支配する一般原理であることを論じているのだが、その大前提として、著者は「目的語位置への繰り上げ（Raising to Object；以下、ROと略記）」を認める立場を取っている。次例参照。

(4) a. John believes Mary to be intelligent. (p.133)
b. John believes [$_{NP}$ △][$_{S}$ Mary to be intelligent].

通説ではこの構文は「例外的格付与（ECM）」と呼ばれ（少なくとも顕在的統語論（Overt Syntax）では）（4a）のMaryは移動しないとされる。よって、ROを認めることは（後述（15）の大きな根拠でもあるのだが）長谷川理論の大きな特徴であり、主張であると言ってよい。

第6章の残りは以上のROの定式化に基づき、「繰り上げ変形とコントロールは相補的な関係にある」という立場から、両者は自然に派生されると論じられている（pp.139-151）。

2．3「第Ⅰ部 総論 第7章 一般原理と照応関係」

再帰形の生起に差異が生じる以下の（5a, b）を例として説明を進める。

(5) a. Which portrait of himself/herself did Nancy say that George had seen ___?
b. How proud of himself/*herself did Nancy say that George was ___? (p.154)

実は著者は長谷川（1983）の段階では、（本書にはその記述はないが）(i)「再帰代名詞解釈規則（RI）は随意的・循環的に適用される」としておきながらも（(5a) 参照）、それでは（5b）が説明できないため、(ii)「NPとProselfが同一サイクル要素（cycle-mates）であるときにはRIは義務的に適用される」という「例外規定（stipulation）」をつけ（5b）の類の例を説明していた。しかし、本書では上記の異なる2種類の規則の適用が、GAoAの帰結として原理的になされるように改訂され、理論の発展がなされたと思われる。まず、以下の基本的な規則を立てる（線形順序が取り込まれていることにも注意されたい）。

(6) 基本的照応規則（Basic Anaphora Rule: BAR）：循環的・義務的。一般A-over-A原則及び時制文条件に従う。
…NP_a…NP_b…において：
(a) NP_bが［＋Anaphora］なら、$NP_a = NP_b$
(b) NP_bが［－Anaphora］なら、$NP_a \neq NP_b$ (p.156)

この規則（BAR）は p.155にもあるように、「NP移動の後、wh移動の前」に

適用される。ここで上述（5a, b）の（wh移動前の）基底構造をそれぞれ以下の（7a, b）に示す。

(7) a. Nancy said that [$_{NP1}$ George] had seen [$_{NP2}$ which picture of [$_{NP3}$ oneself]].
b. Nancy said that [$_{NP1}$ George] was how proud of [$_{NP2}$ oneself].

BARが意味することは、「NP_aがパートナーとしてのNP_bを探す時にも、逆にNP_bがパートナーとしてのNP_aを探す時にもGAoAに従う」ということである。そうすると、まず（7b）の場合には、GeorgeがNPaに、oneselfがNPbに当たり、この時点（＝補文サイクル）で義務的にBARは適用されるのだから、必然的にGeorge＝oneself（NPbが［＋Anaphora］なので）が決定される。この関係はもう変わらないので、wh移動の後で主文サイクルに行っても、Nancyが先行詞に選ばれることはない。よって、（5b）で可能なのはherselfではなくhimselfになる。一方、（7a）ではGeorgeがNP_aであることは同じだが、今度はNP_bの候補がNP_2とNP_3の２つがある。この場合、NP_bの選択にGAoAが働き、$NP_2 > NP_3 \not> NP_1$（＝George）だからNP_2が選ばれることになる。NP_2全体は［－Anaphora］であるから（6b）により、［$_{NP1}$ George］≠［$_{NP2}$ which picture of oneself］という、正しい（が、ある意味当然の）解釈が得られることになる。ここで重要なことは、GAoAの働きによって、NP_3のoneselfはBARが適用されないということである。つまり、著者もp.157の別の例でたとえて言っているが、「BARにとってNP_3（＝oneself）は見えない」のである。このような未処理の照応形が、次に示す「長距離照応形規則」のインプットとなり、正しい解釈が与えられることになる。

(8) 長距離照応形規則（Long Distance Anaphora Rule：LDAR）：循環的・随意的。GAoA及びTSCに従う。
…NP…α…or…α…NP…（αは照応形）
において、NP＝αとせよ。（NPがαの先行詞）（p.164）

まず、（7a）の補文サイクルでLDARを適用すると、可能な先行詞はGeorgeしかないから、当然himselfになる。しかし、この規則は「循環的・随意的」

なのであるから、補文サイクルで適用しなくともよい。その場合、今度は（5a）の構造の主文サイクルでLDARを適用することになるわけだが、この場合、先行詞の候補としてNancyとGeorgeの２つがある。しかし、LDARはGAoAに従うのだから、Nancy ＞ George ≯ oneselfが成り立ち、故に、Nancyが先行詞として選ばれるのである。結果としてこの文はhimself とherselfの両方が可能になるというのが著者の説明である。

第７章の議論は複雑だが、以上示した「GAoAの作用によるBARとLDARの自然な分業」という点が最も重要なポイントである。

２．４「第Ｉ部　総論　第８章　Wh句移動変形と一般的制約」

この章の議論の基本的な流れは以下のようである。まず、wh句移動は複数のＳ境界を越えて自由に適用できる非有界（Unbounded）変形規則であるが（p.182参照）、実際にはRoss（1967=1986）の「複合名詞句制約」などの制限（（9）参照）が存在する。よって、著者はこのような制限を捉えるために、非有界変形規則には（10）の制約があると主張する。

（9）*Who do you know [the boy who insulted __]?（p.182）

（10）非有界変形規則への一般条件：非有界規則のアウトプットは、「複雑度」２以上を付与されると非文法的になる。（p.184参照）（cf. 長谷川（1974b, 1980, 1983））

（10）の「複雑度の理論」が従来のアプローチ（cf. Ross（1967=1986）の「島の制約」理論、Chomsky（1973, 1981）の境界理論、Chomsky（1986b）の障壁理論、Lasnik and Saito（1992）の修正障壁理論）より優れているのは、単純なAll or nothing的な条件（＝それに違反しなかったら文法的、違反したら非文法的）を取らず、（11）のような方法を採ることだとする。

（11）変形適用を困難にする要因をいくつかの構造因子に分解し、それに該当する場合は「複雑度（Degree of Complexity；DCと略）」、例えばDC１を与える。そして、その複雑度の和が２以上になると非文法的になる。（p.184-185参照）

このような構造因子としては（留保条件がいくつか存在するが）、例としては、以下「(12a-c) の右側の列に挙げるものからの抜き出しには DC 1 が与えられる」ことになる。

(12)	無　　標	DC 1 を付与する
a.	[＋V句]（＝VP, AP）	[－V句]（＝NP, PP）
b.	非時制文	時制文
c.	補　　部	修飾部（付加部）

例えば、以下の（13a, b）の例は両方とも「語彙的主要部を持つNPからの抜き出し」であり、Ross (1967=1986) であればどちらも「複合名詞句制約」違反のため両例とも非文法的を予測するが、実際には（13b）は文法的である。

(13) a. *Who did John deny [NP the rumor [S' that he had dated __]]?
b. Which race did John see [NP a chance [S' for us to win __]]? (p.186)

つまり著者のシステムでは、(13a) のいわゆる複合名詞句制約違反は「名詞句からの抜き出し（DC 1）」と「時制文制約（DC 1）」の２つの因子に分解され、その両方に違反している（＝DC 2）ためにアウトということになる。しかし、(13b) は「名詞句からの抜き出し（DC 1）」だけの違反であるので、非文までにはならないことが正しく予測できる、というのが第８章の概ねの議論である。

２．５「第Ｉ部　総論　第９章　付録：句構造分析の諸問題」

この章は付録でありページ数も多くはないが、その内容は最近の極小理論に対する著者の批判であると考えてよい。著者の前提は、「主要部と言えるものは（著者自身は明記していないが、構造主義言語学でいう）「置き換えの原則」に従う」(pp.203-206参照）ということである。その前提から、著者は80年代後半以降の通説とは大きく異なり、「文は主要部を持たない外心構造である（＝SはIPではない、S'はCPではない）」という主張を展開する。

最後に、「Agrと格付与［格照合］」について議論されているが、Pollock

(1989) などのAgrの問題点を、Iatridou (1990) の議論に基づいて簡潔・明快にまとめてある。そして、このようなAgrPの採用は、従来のGB理論での格付与を「すべての格付与［格照合］は、「指定辞－主要部 (Spec-Head) 関係」に基づいて行なわれる」(p.217) という統一的原理にまとめてしまったことに起因すると著者は指摘する。そして、著者は (代案として) 以下の (14) に統合すべきだと主張する。

(14) 格付与［照合］は、同位関係 (sister relation) に基づいて行なわれる。(p.219)

この場合、主格の付与が問題となるが、これに関しては、「[+Fin] の動詞句は、(sisterである) 主語に主格 (Nominative Case) を与える」(p.220) と仮定する。著者の格付与システムでは「素性転移＝浸透 (Percolation：上昇及び下降)」が重要な働きをするのだが、これに基づくと、極小理論で長年の懸案であるthere構文の派生などが (チョムスキーのシステムでは不備が多いのに比し) より適切に説明できる点、著者の格付与システムの方が簡潔かつ経験的にも妥当であると最後に結んでいる。

2．6 「第Ⅱ部 特論」

「第Ⅱ部 特論」は著者が1993～2003年の最近10年間の時期に執筆した諸論文をまとめたものである。

まず、特論の第1章と第2章は扱っている言語事象は異なるが、その主張は根底でつながっている。つまり、統語構造の規則性から予測できないものに対して無理な統語論の説明を与えるべきではなく、その説明に対しては各部門間の分業が必要である、ということである。

第1章「目的語への繰り上げと意味的拒否反応」では、Postal (1974) が早くに指摘したestimate, allege, wagerなどの動詞類が扱われており、「意味論との分業」を論じている。これらの動詞は、目的語位置に通常の語彙的NPが現れると非文になるが、目的語を話題化・受動化・wh移動などによって目的語位置から「どかせる」か、目的語位置でも虚辞のitやthereを置けば、文法的になることが知られている。これをBošković (1997) などは統語論的に

説明しようとしているが、それはテクニカルにも誤りであり、著者はこれを「表層意味フィルター」としての意味的拒否反応によって説明すべきだと論じている。

第2章「*That*-trace現象と寄生空所構文」は「音韻論との分業」を論じる。まずthat痕跡効果は従来、GBの根本原理の一つたる空範疇原理（ECP）によって説明されたが、これは「補文標識は音韻的に直後の単語に依存する」という音韻的凍結効果によって説明さるべきものと提案する。また、その他ECPによる説明が与えられていた付加部からの抜き出し、多重whなどもGAoAによって説明可能であり、ECPは不要だと主張する。次に、寄生空所構文は実は右節点繰り上げなどと同様、「規則の一律適用」に従う擬似等位構造であり、その文法性もthat痕跡現象と同様の音韻的凍結効果によって説明可能だと結論している。

第3章「素性照合とwh句移動」では極小理論で重要な位置を占める素性移動、その前提となる機能範疇*v*、最近のChomsky（2000, 2001a）で提案されたphase（位相）という考えに検討を加えている。要点として、(i) Chomsky（2000, 2001a）における一致（Agree）という演算を用いた格照合はDouble Agreeを必要とする点で煩雑であり経験的にも問題がある、(ii) (i)の格照合問題を最も簡潔に説明するシステムは素性転移（Percolation）であり、(Agroの代替物たる）機能範疇*v*は不要である、(iii) wh句が連続循環的に*v*Pのouter Specを通るという主張はChomsky（1986b）のVP付加が形を変えて復活した、独立の根拠がないstipulationであり、wh移動において*v*Pフェイズを立てる根拠はない、(iv) 非顕在的なwh移動（LF移動）は存在しない、ということなどが主張されている。

第Ⅰ部第9章や第Ⅱ部第3章は共通して極小主義に対する警告と理解すべきであろう。つまり、「音形のない機能範疇」や「不可視のLF移動」は強力な理論装置であり、よほどの根拠に基づかない限りは安易な措定を慎むべきである、という主張である。

3．議　論

3．1　本書全体の基本的立場

著者の本書での基本的スタンスは以下に集約されるであろう。

(15) 個別言語には、単語の意味特性には還元しえないような、純粋に統語構造上の規則性が存在する。

この記述は、「はしがき」、総論 p.52（3.1節）、pp.73-74（3.3節）、「目的語繰り上げ変形・2次述語の性質」（6.2 節）、「主要部の概念」（9.1節）などで繰り返し出てくる。これは通説の、特に チョムスキーの、以下の主張を意識しているのは疑いがない。

(16) If we succeed in eliminating recourse to c-selection as well as phrase structure rules, thus reducing syntactic representations at D-structure to projections of semantic properties of lexical items, it will follow that the complement of any head in a syntactic representation must be s-selected by it, because there is no other way for the position to exist.（Chomsky 1986a : 90）

つまり チョムスキーは、文法において必要なのは意味選択（s-selection）だけで、それに「規範的構造具現（Canonical Structural Realization ; CSR）」を指定しておけば、範疇選択（c-selection）は不必要だと主張している。[2] これを著者は以下のようにまとめている。

(17) 単語の意味特性が与えられれば、自動的にその単語が構成［投射］する句構造が予測できる。(p.71 など)

この（16）・（17）の仮説は最近の生成文法理論においてかなり有力な方向であろう。例えば、関係文法 Perlmutter and Postal（1984）の「普遍的始発付与仮説（Universal Initial Assignment Hypothesis）」や GB 理論 Baker（1988）の「主題役割付与均一性仮説（Uniformity of Theta Assignment Hypothesis ; UTAH）」はまさにこの方向の研究である。これらの研究は概ね、「同一の主題役割を担う項は、D構造において同一の統語構造を持つ」という趣旨の仮説を主張しているのだが、この考えは「非対格仮説（Unaccusative Hypothesis）」、「普遍的（＝通言語的）に共通な LF 構造の存在」、Larson（1988）流の「VP殻（VP-shell）の仮定」、などを導く要因となったものであり、現在の極小理論

の方向を決定付けた仮説の一つだと言ってよい。

しかし、この方向はある種、1970年代の生成意味論的な方向への回帰である。(もちろん、当時の生成意味論と現在の極小主義はその概念的位置付けが大きく異なる。) だが、1970年代前後に「生成意味論」が日米両国において大きく台頭した時、Hasegawa (1968) で「強力すぎる変形の過剰能力を規制する」ことを提案し、Hasegawa (1972) で「解釈意味論」の立場を擁護した著者からすれば、現在の極小主義の方向は受け入れ難いものであろう。つまり、(17) の方向は著者の言い方を借りれば「飽くまでも希望的観測」なのであって、その妥当性は経験的事実によって一つ一つ立証されるべきものだということである。その意味からも、著者の (15) の立場の追及はなされてしかるべきものである。著者は (15) を支える議論を本書でいくつもしているが、その基盤は何であろうか。評者は以下の (18) だと思う。

(18) a. 英語は個別言語の句構造規則が、Vの後に NP-slotの存在を許すから。

b. 著者は目的語への繰り上げ (RO) を認めるから。(cf.としては長谷川 (1973) の再調整規則)

c. 目的語の位置に (動詞の単語の意味からは予測不可能な) 虚辞的要素 (例、rough it, lord it over someone, cool it など) も生ずるから。

この点、(18a, c) は比較的、同意が得られやすいものと思われる (本書総論第5・6章、長谷川 (1986) など参照)。そうすると、論点は (18b) の「RO存在の可否」であろう。

本書でROを「経験的に」認めるべきだとする根拠は以下の2種類の事実に集約されると思われる (総論6.2.1節参照) : (i) We *proclaimed* John *to the public* [s △ to be a hero].の類の文においてJohnは補文主語位置から「to the publicを越えて」主節の目的語位置へのROがあったと考えざるを得ない、(ii) Joan believes him to be a genius even more fervently than Bob does.においてhe ≠ Bobであることから (cf. Joan believes (that) he is a genius even more fervently than Bob does.ではhe = Bobが可能)、himがBobを準c-統御 (=枝分かれ節点を一つ繰り上げたc-統御) しているはずであり、そのためにはhim

がROによってbelieveの直接目的語の位置に繰り上がったと考えざるを得ない（Postal（1974）参照）。

以上の２点の議論は鋭いものと思われるが、ここで注意すべきことがある。チョムスキーは確かに1970年代からROの存在を否定しているわけだが、実は極小理論においてAgrPを認めていたChomsky（1995）のChapter 3までの段階や、最近のChomsky（2001a）で「２番目の代案（alternative 2）」としているものも「実質的にはROの存在を認めているのと同じ」ことだということである。つまり、著者のROの議論は、Koizumi（1995）の「分離動詞句仮説（Split-VP Hypothesis）」やChomsky（1995: Chapter 4）以降の*v*Pを前提とする構造などを仮定すれば、（AgroPを仮定しなくとも）ほぼ同様の議論が可能になってしまうのである。よって、著者の主張の妥当性は、今後*v*P分析が正しいか否かが重要な論点になると評者は考えている。最近の著者による特論第３章もそのような主張の一つであろう。

３．２　変形の必要性

以下の例は本書で何度が登場するもので、「変形というしくみ」、「規則の循環的適用」、「長距離照応規則」などが文法理論には不可欠であることを証明する、長谷川理論の根幹を成す例であろう。

(19) a. Lucy said [that he was proud of Snoopy].
　　b. [AP How proud of Snoopy] did Lucy said [that he was __]?（a、bともに、he ≠ Snoopy）（p.20）

(20) a. Lucy said [that Snoopy was proud of himself/*herself].
　　b. [AP How proud of himself/*herself] did Lucy said [that he was __]?（p.164）

特に、変形というしくみが「経験的に」必要だということを、著者は80年代から何度となく主張してきた。つまり、(19b)・(20b) の指示関係を決定するためには、共に (19a)・(20a) の段階（＝基底構造）を想定し、かつその補文サイクルの段階で指示関係を決定した後、移動変形によって文頭に動いた、と考えなければならない。

これは移動変形の必要性を強く支持するものであり、同時に「変形を認め

ないHPSG理論（Pollard and Sag（1994）など参照）やLFG理論（Bresnan (ed.)（1982）など参照）はその意味で誤りである」ことを意味する点でも重要である。文頭のCに「はじめから」wh句を生成しておき、後からそれに相当するXPが出てきたら文法的だとする仕組みでは、通説の束縛原理違反を引き起こしてしまう。HPSG理論では「意味論」は統語論とは別な部分で処理するという「説明」をするかもしれないが、それでも「変形は経験的に必要だ」という著者の議論の本質部分は変わらず妥当であろう。また、痕跡を用いる通説の束縛理論でも、(19b)・(20b)の指示関係を説明するのは困難である。なぜなら、両文とも、文末のwasの後にある痕跡はAP全体の痕跡なのであって、Snoopyやhimself自体のNP痕跡ではないからである。

3．3　著者の照応理論とチョムスキーの束縛理論

チョムスキーは極小理論を展開する頃（Chomsky（1995: Chapter 3）以降）から、以前、束縛理論で扱っていた事象が純粋の「統語論」の現象ではなく、“post-cyclic”の「実質的なLF解釈規則」として扱われるようなものかもしれないと示唆している。[3] そういう状況の中、著者の体系は「統語論での照応理論の追及」という一つの方向を示していると言える。

それでは、著者の照応理論には通説の束縛理論（BT）と比して、どのような特徴があるであろうか。第1に、著者は指標という概念を用いない。長谷川理論は1970年代から一貫して「痕跡」や「指標」を用いることを批判してきた。[4] 第2に、一般局所理論たるGAoAが「意味解釈規則」たるBARやLDARと有意義にリンクして効果を発揮するということがある。第3は「順序関係」を重要視することである。線形順序がOvert Syntaxの現象ではないとする通説（Kayne（1994）、Chomsky（1995: Chapter 4）参照）と比しても、探求すべき方向の一つであろう。第4に、長谷川理論では「絵画名詞(picture noun)」の現象（つまり逆行束縛）も自然に説明が与えられるよう理論の中に組み込まれていることが挙げられる。多くの理論では多かれ少なかれ絵画名詞を例外扱いしていると言える。第5は、著者のBARとLDARは基本的には「構造関係」からのみ、その同一・非同一の指示が決まるという点が挙げられる。

第5の点はチョムスキーのBTとは大きな違いである。BTの大きな難点は、

実は「統率範疇（GC）の設定」であった。BTの基本的な概念は「照応形や代名詞類の先行詞が、「あるGCという領域の中に」なければならない（または、あってはならない）」というものであった。本来のGCの概念は「①αと、②αの統率子と、③それを含む最小のSまたはNP」という比較的簡潔なものであった。だがチョムスキーは整合しないデータが出てくる度にGCを拡張しその概念を複雑にした。まず、③を「接近可能な大主語（Accessible SUBJECT）」と変え、「iの中のiの条件（*i*-within-*i* condition）」を適格性条件として付け加え、さらにChomsky（1986a）では「完全機能複合（Complete Functional Complex；CFC）」や「束縛理論適合（BT-compatibility）」なる概念をも導入した。これらが理論発展の当然の流れであるにせよ、結局説明不可能なデータが数多く残り、Chomsky（1986a）以降は上述の如く、「BT全体の体系的な言及」はチョムスキー自身の論文の中ではなされなくなったのが実情である。このようなGCの難点を象徴しているのが以下の文だと評者は思う。

（21）*John believes [(that) himself is a genius].（p.158）

長谷川理論の場合、この種の文は「時制文制約（TSC）」によって非文となる（p.159、pp.168-169参照）。しかし、チョムスキーは1980年代以降、「TSCは束縛原理（A）に統合された」としたので、（21）の非文性は「himselfのGCである補文that節内に先行詞がない」ことに起因するとした。だが、その後チョムスキーは、「iの中のiの条件」や「接近可能な大主語」という概念を不要なものとしてCFCを導入したわけだが、そうすると、（21）の文ではhimselfの可能な先行詞はJohnしかないわけで（結局、GCは文全体に戻り）束縛原理としての違反はないことになってしまう。そこで、これを非文にするためにChomsky（1986a, 1995: Chapter 1）では概ね以下のような方策を取った。以下の（22）を見られたい。

（22）John self+I believe [CP (that) *t* is a genius].

つまり再帰代名詞のLF移動を認め、（22）の場合はその痕跡*t*がいかなる手

段によっても適正統率されないので、[5]非文だという説明をした。上記のようなLF移動を（他の言語はともかく）英語に認めていいのかという議論や、このようなECP違反からの説明が適切であるのかは別にしても、結局、チョムスキーも著者も（21）の非文法性を「照応理論の原則以外の」ところに求めているのは興味深いと思われる。[6]

3．4　一般A-over-A原則

容易に想像されることだが、著者の一般A-over-A原則（GAoA）[7]はChomsky（1964）の「Aの上のAの原理、上位範疇優先の原理（A-over-A Principle）」とChomsky（1973）の「優位性の条件（Superiority Condition）」の利点を有意に組み合わせ、難点を排除することから産み出されたと思われる。最近の理論に詳しい人間からするとGAoAは　Chomsky（1995）の「最小連結条件（Minimal Link Condition；MLC）」、Travis（1984）の「主要部移動制約（Head Movement Constraint；HMC）」、Rizzi（1990）の「相対化最小性（Relativized Minimality）」などの単なる一変種と見えるかもしれない。[8]

しかし、GAoAは（i）上記理論は「移動」のみを規制する理論だが、GAoAは「照応形解釈規則（上述BAR、LDAR）」や「PROのコントローラーの決定」なども広く規制する一般局所理論である、（ii）上記理論はc-統御を用いて定義するが、GAoAは上位（superior）という、より広い概念を用いて定義する（c-統御は「支配関係」を除外する）、（iii）上記理論はGAoAの（1b）′の「$A_1 > A_2 \not> B$ならば規則RはA_1のみに適用される」ことは定めていない、という諸点で異なる。

（ii）の点に関しては、例えばその効果は以下の如き単純な再帰形の決定にも効力を発揮する。（チョムスキーの束縛理論と異なり、統率範疇もc-統御条件も用いないことに注意。）

（23）[$_{NP1}$ The former wife of [$_{NP2}$ the President]] admires herself/*himself.（p.127）

この場合、c-統御条件では [$_{NP2}$ the President] は [$_{NP1}$ The former wife of the President] に含まれているので、“NP_1 c-commands NP_2” とは定義上言えない。しかし、上位という概念では（1c）の定義上、“NP_1 is superior to NP_2” が成り

立ち、よって、$NP_1 > NP_2 \not> proself$から、herselfだけが可能ということになる。

この上位という概念の採用は現在の極小主義に対しても示唆することがあるように評者は思う。以下の例を見られたい。

(24) *John$_i$ seems [$_{CP}$ (that) [$_{IP}$ [$_{NP}$ the proof [$_{IP}$ t_i to be guilty]] was given]].

(Saito 2001: 128)

この例は、Lasnik (1985) が本来、「連鎖に課せられる局所性条件 (Locality Conditions on Chains)」を論じた例と関連している。[9] (24) の文はGB理論の枠組みであれば「空範疇原理 (ECP)」違反によって非文とされたはずである。しかし、ECPを含めGB理論の諸原理の多くが破棄された今、Johnの主節主語位置への繰り上げを妨げるものはないはずである。すなわち、牽引 (Attract) と近接性 (Closeness) の定義 (Chomsky (1995) その他参照) はc-統御によってなされているのだから、名詞句全体のthe proof John to be guiltyが、その中に含まれるJohnよりも「近い」とは言えず、Johnが格を照合する最後の手段として主節主語の位置に移動することを妨げるものはない。よって、(24) はやはり (事実に反して) 文法的を予測してしまう。[10]

この点、上位という概念を用いる長谷川理論では、the proof John to be crazy全体の名詞句がJohnよりも上位であることが言えるから、[the proof John to be guilty] > [John] ≯ [主節主語位置]、が成り立ち、GAoAはthe proof John to be guilty 全体が移動することを予測する。よって、Johnを移動させた (24) は非文であることが正しく予測される。[11]

長谷川理論とチョムスキーの極小主義理論は前提とする仮説群が大きく異なることは言うまでもない。しかし以上の議論は、極小主義理論の基本的な派生構築においても、その定義をc-統御のみで行なうと不十分な場合がありうることを示唆している。

もちろん、GAoAにも問題点はある。評者は次の2点 — (i) 主要文法範疇 (MC) の定義において、なぜ補部として働くPPはカウントしないのか、(ii) 上記で利点として挙げた (1b) は何からの帰結としてそう言えるのか — を挙げておきたい。つまり、「A_2がBより上位でない」時、規則RがA_2に適用できないことは当然としても、なぜそれが規則RがA_1に適用されることに

直結するのか。経験事実がそうなっているからだと言われればそれまでだが、理論の効果を保証するためには、本来は説明が必要であろう。

3．5　複雑度の理論

まず第1に「名詞句からの抜き出し」について、著者は以下の（25）は「2回の名詞句からの抜き出し＝DC 2」で非文だとする。だが、著者自身も認めるように、Ross（1967=1983）の有名な（26）の例が文法的であることは説明できない。

(25) *What did they hear [NP1 some funny stories about [NP2 pictures of __]]?

（p.192、Chomsky（1977b）より）

(26) Reports which the government prescribes [NP1 the height of [NP2 the lettering on [NP3 the covers of __]]] are invariably boring.

（p.193、Ross（1967=1983: 121）より）

ここで詳述する余裕はないが、(25)・(26) のような文法性の違いを捉えるためには、Tonoike（2000）などが論じているように、wh移動と随伴現象（Pied-Piping）の関係について、Focus（焦点）のような素性を設定する必要があると思われる。(Focusとwh移動の関係に関してはWatanabe（2001）の古代日本語の係り結びの分析も参考になる。)

第2に「時制文制約（TSC)」について議論する。以下に著者のTSCの定義を示す。

(27) …Y…［$_{\alpha}$…A…］…Y…におけるAとYへの規則Rの適用……DC 1

条件：αはAを支配する最初の時制文（S', S）でありかつAはα内で、(Ia-b) に当たるXP（省略、本稿後述（33）参照）に支配されていない。(p.192)

通説ではChomsky（1981）以降、「TSCは束縛原理（A）に還元されたので必要ない」ということになっている。しかし、本書の随所に散見される以下のデータはどうであろうか。

(28) Tough構文

a. It is hard [PRO to believe [that Mary loves John]].

b. *John is hard [PRO to believe [that Mary loves __]]? (p.30)

cf. Who did Bill say it's hard to believe that Mary loves __]]?

(29) 従属節主語としての再帰代名詞

a. John believes [himself to be a genius].

b. *John believes [(that) himself is a genius]. (p.158)

(30) 絵画名詞中の再帰代名詞

a. *These pictures of himself show [that Snoopy is an excellent pilot].(p.168)

b. This picture of himself proves [John to be a football player].

(長谷川 1983 (2) : 103)

(31) PROの制御子

a. *[PRO contradicting himself] will prove [that Mr. Jones is a liar].

b. [PRO contradicting himself] will prove Mr. Jones to be a liar.

(p.168、Bresnan (1982) より)

(31) 複合名詞句制約違反

a. *Who did John deny [NP the rumor [S that he had dated __]]?

b. Bush must do two things that he showed [NP no inclination [S PRO to do __]] during the campaign.

c. a negotiated settlement which the opposition forces expressed [NP desire [S PRO to take part in __]] during the campaign.

d. Which race did John see [NP a chance [S for us to win __]]?

(以上、p.186)

(32) 付加部からの抜き出し

a. *Who did John accept the job (so) [S that he might please __]]?

b. *Who did he get so angry [S that he fired __]]?

c. *Who was he so exhausted [S that he couldn't speak to __]]?

d. What did he go all the way to Brazil [S PRO to buy __]]?

e. a man whom Israel moved heaven and earth [S PRO to get out of jail]]

f. It's the children that we are staying home [S PRO to take care of __] that are going to be tomorrow's leaders.

g. the working-class benefits they (=socialists) fought so long [s PRO to achieve __]] (以上、pp.188-189)

これらの例は確かに「束縛原理（A）に還元されないTSCのデータ」と言えるであろう。評者もこれらのデータを考慮するとTSCは必要であるか、少なくともそれらの事実の対比は何らかの形で定式化されるべきだと思う。

しかし問題点もある。例えば（27）のTSCの定義の「条件」とされているものは、総論6.2.2節でのTSCの記述を用いると、実質的内容は以下の（33）である。

(33) αはAを支配する最初の時制文（ただしAはα内で、NPに支配されていない）。(p.139)

これは先程論じたように「名詞句の抜きだしはそのつどDC 1を与える」のに対し、「TSCは何回時制文が出てこようがDC 1しか与えない」と主張しているのと同じであり、一貫していない。実はこれは、チョムスキーが1970年代に「時制文条件」を提案していたわけだが（以下の（34）参照）、当時著者自身が（長谷川（1981）などで批判していた）「但し、YはCompの位置にない」という但し書きをつけているのと実質的に同じだと評者は思う。

(34) No rule can involve X and Y (X superior to Y) in the structure

$\ldots X \ldots [_{\alpha} \ldots Z \ldots - WYV \ldots] \ldots$

where (a) Z is specified subject of WVV

or (b) α is a subject phrase properly containing MMC(Y) and Y is subjacent to X

or (c) Y is in Comp and X is not in Comp

(d) Y is not in Comp and α is a Tensed S.

(Chomsky 1973=1977a: 112)

もちろん、著者の（33）の条件は長谷川理論の体系には不可欠な但し書きである。なぜなら、通説では「wh移動はCOMPからCOMPへの継起循環的

(Successive Cyclic) な各駅停車の移動」を主張するのに対し、著者は70年代に痕跡理論が提案されて以来ずっと「wh句移動は元位置からいくつものS境界を越えて文頭のCOMP位置に移動する一足飛びの非有界 (Unbounded) 移動である」(本稿2.4節、特論第3章参照) と主張するからである。そうすると、(33) の条件を付けておかなければ、以下の (35) のタイプの文法的な文を (この場合ならDC 3になるため) 誤って、全く非文法的と予測してしまう。このような点を考慮すると著者の TSCはもっとすっきりとした定式化が必要なのではないかと思われる。[12)]

(35) What [$_{S1}$ do you think that [$_{S2}$ John believes that [$_{S3}$ Tom bought __]]]?

第3に、著者は「文中にwh句が2つ以上ある場合にはGAoAが関与する」ことを総論の6.1節、8.2節、8.3節、特論の2.6節で論じているが、議論の多いwhyが関与する場合 (複雑ではあるが) について、以下のような補足が本文であればよかったと思う。(以下の説明が著者の考えと一致するかどうかはわからない。) (36a,b) の対比を見られたい。

(36) a. Why did you buy what?
b. *What did you buy why?

まず (36b) が非文なのは、$\underbrace{\text{why} > \text{what} \not> \text{C}}$であるからwhatが移動することがGAoAによって排除されるからである。次に、(36a) に関しては、Lasnik and Saito (1992) はこれを文法的と判断するのでGAoAの予測と一致する。また、(36a) を非文法的あるいはほとんど容認不可能と判断するEngdahl (1985) やKuno and Takami (1993) に対しては、「統語論上」はGAoAによってwhyが文頭に移動できるはずだが、「whyはペアリストの答を持たない語彙的性質がある」ので (36a) が容認不可能になるという説明が可能であろう。これは以下の (37a, b) が共に非文であることによって裏付けられる。

(37) a. *Who left why?
b. *Why did who leave?

次に、wh句が3つ以上存在する時、話はさらに複雑になるが、Lasnik and Saito（1992）が以下の（38a）が文法的である（＝GAoAの予測通り）ことに加え、2つのwhoをペアにして答える場合には（38b）も文法的である（＝GAoAに反する）と指摘しているという事実に関して、現在の著者はどう考えているのであろうか。（(38b）の強勢記号は著者のもの。）

（38）a. Who wonders who bought what?
　　b. Whó wônders whât whó bôught?（p.255）

著者は特論第2章を執筆した当時（＝1993-94年頃）には、（38b）の対比強勢（contrastive accent）に着目し、以下の（39）を主張していた。

（39）対比強勢をもつwh句は、GAoAの適用から除外される。（p.256）

（38a, b）を現在の極小主義の立場で説明を与えるとすれば、概略、「LFにおいて新しい解釈を生み出す可能性がある場合には（MLCに反して）whatを繰り上げてよい」という方策が一つの有力な方向であろう。[13] 評者としてはこの点、最近のチョムスキー理論との関連という点でも現在の著者の議論が欲しかった気がする。

4．おわりに

本稿では本書の内容を概観し、評者が特に重要だと思う点について議論してきた。

最近の生成文法理論は認知科学化が進み、個別言語の文法解明よりは普遍言語の文法解明に関心が置かれていることは周知のことである（それは本来の目的からして当然の移行であろう）。そのような中、月刊『言語』2001年2月号で「英語学の新時代—方向の模索と提言」、『英語青年』2001年4月増大号で「英語学のこれから」という特集記事が組まれたことは記憶に新しいことである。その中で、多くの執筆者が「言語理論の抽象化と英語学との乖離」を問題にしていたと評者は理解している。

この点、本書の刊行は「英語個別言語の説明理論としての生成文法理論」

という初心の問題を我々読者に再認識させてくれたと思う。(この評者の「英語学的な観点からの評価」を著者長谷川欣佑先生や他の読者が同意されるかについては意見の分かれるところであろうし、本書はもちろん普遍文法理論を視野に置いての執筆であろう。)

本書は言語学を学び始めた初心者にも、また、第一線の生成文法研究者にもぜひ読んで欲しい一冊であるという総括の書評を記して、本書評論文の結びとしたい。

注

1) Lasnik (1999: Chapter 5, 2000) も動詞形態論 (Verbal Morphology) について著者と同様、接辞転移 (Affix Hopping) を有意に用いて議論を進めているのは興味深い。

2) なお、最近のチョムスキーはそのS選択までも、独立に設定する必要がないという方向を模索している。Chomsky (2001b: 8-9) など参照のこと。

3) 最近の記述としては、Chomsky (2000) の以下の注を参照のこと。

(i) Operations lacking overt counterparts and apparently not interacting with CHL might be among the principles of interpretation of LF, hence "postcyclic," inspecting a representational level in the manner of many other systems (including binding theory, on the assumptions of MP).

(Chomsky 2000: 144, fn. 44)

4) 皮肉にも、Chomsky (2000, 2001a, b) では「指標」も「痕跡」も廃されている。

5) (22) において補文内のI (＝Agr) は主語を統率はするが適正統率はしない。また、thatは顕在的でも非顕在的でも英語では統率する力がないとされる。一方、主文のbelievesもCPとIPの両方を越えて痕跡 *t* を統率することはできない。よって、いずれの方法でも (22) の主語痕跡 *t* は適正統率されない。

6) (21) の非文法性は「英語の再帰代名詞は対格を有する」とすることに帰着すべきかもしれない。(cf. 同じ照応形でも相互代名詞は、(i) each other's などの属格を持つ、(ii) 再帰代名詞と相互代名詞は実際の分布が異なる、など性質が異なるものと思われる。)

7）GAoAと複雑度の理論の初出は長谷川（1974a, b）である。著者のこの２つの理論に対して中島（1990）は（i）のようにコメントしているが、評者も全く同感である。

(i)『英語青年』に掲載された「Generalized A-over-A principle」（1974［a］）と「変形適用における複雑度」（1974［b］）は、その後チョムスキーが提案した下接条件やバリア理論と相通じるところがあり、この時期に英文で発表していたならば国際的な評価を得られたものと惜しまれる。（中島 1990: 61）

8）著者と立場は異なるが、A-over-A原理を極小主義の観点から択え直そうとした試みとしてFukui（1999）がある。

9）ところで、以下の類の例は現在の（極小主義の）枠組みでも説明可能である。つまり、（ia）ではhis$_i$がJohn$_i$を、（ib）ではhis$_1$がJohn$_1$を、それぞれc-統御しているので、牽引（Attract）の定義によりhisを越えてJohnが移動することはない。

(i) a. *John$_i$ seems [$_{CP}$ (that) [$_{IP}$ [$_{NP}$ his$_i$ proof [$_{IP}$ t_i to be guilty]] was given]].

(Saito 2001: 128)

b. *John$_1$ seems [$_{CP}$ that [$_{IP}$ [$_{NP}$ his$_1$ belief [$_{IP}$ t_1 to be rich]] is crazy]].

(Lasnik and Saito 1992: 139)

なお、これらの例は、当時のGB理論においては「格の照合」を満たし、名詞句痕跡t_iやt_1が「束縛原理（A）」に従った上、「空範疇原理」を満たしてしまうことが問題であった。

10）Saito（2001）は日本英語学会シンポジウムの発表で、相対化最小性や最小連結条件（MLC）の効果は牽引の定義に組み込まれることになるので、（24）の非文性は結局、移動の定義から説明されることになる、という主旨の説明をしていたが、それは誤りである。

もう一度記すが、牽引の定義はc-統御によってなされており、そして「c-統御の定義は含み、含まれる関係を除外する」のである。つまり、the proof John to be guiltyはその中に含まれるJohnに対してc-統御関係は働かないし、よって「近い」とも言えない。

11）ちなみに、この派生を無理に続けてthe proof John to be guilty全体の名詞句を移動させても（＝*［The proof John to be guilty］$_i$ seems that t_i was

given.）（原理上はこの名詞句全体の格は照合済みで不活性のはずなので移動できない）、させなくても（＝*It seems that the proof John to be guilty was given.）、Johnの格が照合されずに残ってしまうので、いずれにせよ非文である。

12）なお、TSCのその他の問題点、（28-32）のデータをTSC以外の立場から説明する可能性については、紙幅の関係上、Nomura（2005: Appendix to Chapter 9）を参照されたい。

13）Chomsky (2001b)の以下の記述を参照。

（i）Optimally, OCC should be available only when necessary: that is, when it contributes to an outcome at SEM that is not otherwise expressive, the basic Fox-Reinhart intuition about optionality.（Chomsky 2001b: 10）

参考文献

Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing.* Chicago: The University of Chicago Press.

Bošković, Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Bresnan, Joan W. (1982) "Control and Complementation." *Linguistic Inquiry* 13: 343-434.

--- (ed.) (1982) *The Mental Presentation of Grammatical Relations.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures.* The Hague: Mouton.

--- (1964) *Current Issues in Linguistic Theory.* The Hague: Mouton.

--- (1973) "Conditions on Transformations." In Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle,* 232-286. New York: Holt, Rinehart and Winston. Also in Chomsky (1977a), 81-160.

--- (1977a) *Essays on Form and Interpretation.* New York: Elsevier North-Holland.

--- (1977b) "On *Wh*-Movement." In Peter W. Culicover, Thomas Wasow and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax,* 71-132. New York: Academic Press.

--- (1981) *Lectures on Government and Binding Theory.* Dordrecht: Foris.

--- (1986a) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use.* New York: Prager.

--- (1986b) *Barriers.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

--- (1995) *The Minimalist Program.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

--- (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework." In Roger Martin, David Michael, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik,* 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.

--- (2001a) Derivation by Phase. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language,* 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.

--- (2001b) Beyond Explanatory Adequacy. *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20: 1-28.

Engdahl, Elisabet (1985) "The Scope of *Why.*" Paper Read at LSA December Meeting.

Fukui, Naoki (1999) "An A-over-A perspective on Locality." In Masatake Muraki and Enoch Iwamoto (eds.) *Linguistics: Search of the Human Mind — A Festschrift for Kazuko Inoue,* 109-129. Tokyo: Kaitakusha.

Hasegawa, Kinsuke (1968) "The Passive Construction in English." *Language* 44: 230-243.

--- (1972) "Transformations and Semantic Interpretations." *Linguistic Inquiry* 3: 141-159.

長谷川欣佑（1973）「文法の説明力—Raising論（1）-（2）」『英語青年』第119巻第1号: 17-19、第2号: 71-73. 東京：研究社.

---（1974a）「Generalized A-over-A Principle（1）-（2）」『英語青年』第119巻第11号: 736-737、第12号: 808-810. 東京：研究社.

---（1974b）「変形適用における『複雑度』」『英語青年』第120巻第1号: 17-20. 東京：研究社.

---（1980）「変形適用への一般的制約」『英語青年』第126巻第6号: 274-279. 東京：研究社.

---（1981）「変形の性質とチョムスキーの文法体系」寺澤芳雄他（編）『英語の歴史と構造』（宮部菊男教授還暦記念論文集）、331-350. 東京：研究社.

---（1983）「文法の枠組—統語理論の諸問題（1）-（4）」『言語』第12巻 第

5号: 97-106、第6号: 100-108、第7号: 100-109、第8号: 90-99. 東京：大修館.

--- (1986)「チョムスキー理論の成果と展望」今井邦彦（編）『チョムスキー小事典』第X章、283-306. 東京：大修館.

Iatridou, Sabine (1990) "About Agr(P)." *Linguistic Inquiry* 20: 551-577.

Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Koizumi, Masatoshi (1995) Phrase Structure in Minimalist Syntax. Doctoral Dissertation, MIT. (A revised version published by Hituzi Syobo, Tokyo, 1999.)

Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory.* Chicago: The University of Chicago Press.

Larson, Richard K. (1988) "On Double Object Construction." *Linguistic Inquiry* 19: 335-391.

Lasnik, Howard (1985) "Illicit NP Movement: Locality Conditions on Chain?" *Linguistic Inquiry* 6: 481-490.

--- (1999) *Minimalist Analysis.* Oxford: Blackwell.

--- (2000) Syntactic Structures *Revisited.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move* α. Cambridge, Mass.: MIT Press.

中島平三（1990）「[資料・日本の英語学25年] 生成文法」『言語』第19巻第11号: 60-63. 東京：大修館.

Nomura, Tadao (2005) ModalP and Subjunctive Present. Doctoral Dissertation, Aoyama Gakuin University.

Perlmutter, David M. and Paul M. Postal (1984) "The 1-Advancement Exclusive Law." In David M. Permutter and Carol G. Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar* 2, 81-125. Chicago: The University of Chicago Press.

Postal, Paul M. (1974) *On Raising — One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Pollard, Carl J. and Ivan A. Sag. (1994) *Head-Driven Phrase Structure Grammar.* Chicago: The University of Chicago Press.

Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP." *Linguistic Inquiry* 20: 365-424.

Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Ross, John R. (1967) Constrains on Variables in Syntax. Doctoral Dissertation, MIT. Published as Ross (1986).

--- (1986) *Infinite Syntax!* Norwood, N.J.: Ablex Publishing Corporation.

Saito, Mamoru (2001) "Derivational Phase and Cyclic Interpretation of Chains." Paper Presented at Workshop, Phase and Cyclicity, 19th National Conference of the English Linguistic Society of Japan. (*Conference Handbook* 19: 128-133.)

Tonoike, Shigeo (1999) "Agreement as Dislocated Morphological Features." *Metropolitan Linguistics* 19: 1-21.

Travis, Lisa deMena (1984) Parameters and Effect of Word Order Variation. Doctoral Dissertation, MIT.

Watanabe, Akira (2001) "Loss of Overt *Wh*-movement in Old Japanese and Demise of "Kakarimusubi"." 『平成12年度COE形成基礎研究成果報告』(課題番号08CE1001、研究代表者　井上和子) : 35-57.　神田外国語大学言語科学研究科.